

## はじめに

これは、先史時代の洞窟壁画についての本です。

一万数千年前とか、四万年前とかに洞窟の壁に描かれた絵画は、これまで自分が世界の美術館や遺跡、寺院などで見てきた芸術作品のなかで、いちばん心を動かされたものの一つです。ヒトが絵画を描くというのを、これほど純粹に、これほど力強く描いた絵というのは、他にあまりありません。

この本は、二〇一七年の夏、私と息子の琳太郎が、フランスの先史時代の洞窟壁画を見に行った旅行記です。その夏、フランス南西部のレゼジーという村や、ヴァロン・ポン・ダルクという村に、レンタカーを借りて息子と二人旅をしました。途中、中世の寺院に立ち寄り、また旅の始まりと終わりには都市に滞在し、イタリアのミラノや、パリの美術館で、レオナルド・ダ・ヴィンチを始め、たくさんの美術作品を見ました。そういう旅のあれこれが、この本では綴られます。

しかし、この本は、単なる旅の記録ではありません。この本の構成は、「旅」の章と、「夜の語り」という章が、交互に書かれる形になっています。「夜の語り」の章は、美術の歴史や、自然に対する考察など、「旅」の章の旅行記の補足的な説明の役割を果たしています。もちろん、この本のストーリーを背骨のように貫いているのは、二人旅の記録です。しかし「夜の語り」の章と合わせてお読みいただくことで、それが先史時代のアートへの理解の助けとなり、ひいては「私たちヒトは、なぜ絵を描くのか」という大い

なる問いに、立体的に迫るものとなることでしょう。

あの夏、自分は息子とフランスの田舎を旅しました。息子は大学で絵画を専攻し、いまは大学院で学んでいます。彼自身が、アートと取り組みながら生きてきました。十八世紀の生物学者エルンスト・ヘッケルは、「個体発生は系統発生を繰り返す」と言いましたが、この本は、息子の幼児からの成長をサンプルとした、絵画における「個体発生は系統発生を繰り返す」ことへの、自分なりの具体的な考察でもあるのです。

ヒトはなぜ絵を描くのか、という問いは、なにも先史時代のクロマニヨン人だけに向けられるものではありません。それは、自分たち、すべてのヒトに対する問いでもあります。

この本の中で、ご一緒に旅をして、ぜひご一緒に思索していただけたらと思います。

## 目次

- 第一日 最も古い絵画……明日香村・キトラ古墳壁画へ 7
- 第1章 夜の語り……旅の準備として「先史時代の洞窟壁画」についての、 20
- 第二日 ショーヴェ洞窟壁画への旅……人類最古の絵画 35
- 第2章 夜の語り……ネアンデルタール人と絵画の起源をめぐる、 58
- 第三日 旅の途中……中世ロマネスクの村へ 79
- 第3章 夜の語り……西洋美術の歴史をめぐる、 91
- 第四日 レゼジー村の洞窟壁画への旅……本物の洞窟壁画を見る 111
- 第4章 夜の語り……写真家・星野道夫のアラスカをめぐる、 137
- 第五日 ラスコ洞窟壁画への旅……ラスコー2とラスコー4 155
- 第5章 夜の語り……狩猟と解体の世界をめぐる、 177
- 第六日 パリへ……そして旅の回想 197
- 最終章 ヒトの絵画の四万年 232

その夏、フランスに、息子と先史時代の洞窟壁画を見に行った。彼は大学院生で、絵画や映像を専攻している。その息子と二人で、ラスコーやショールヴェという洞窟にある、何万年も昔の古い壁画を見に行った。

ヒトはなぜ、絵画を描くのか。なぜ、描くなどということ始めたのか、そういうことを考えたくて、ともかく、できる限り古い「人類の絵画の起源」とでも言えるものを見に行くことにしたのだ。ヒトが初めて描いた絵、というものを見たいと思ったのだ。

旅は、イタリアのミラノやフィレンツェで美術館を見た後、フランスのリヨンに入った。リヨンでレンタカーを借り、フランスでの二日目にショールヴェ洞窟に行った。それからフォン・ド・ゴーム、ラスコーなどの洞窟を巡った。

フランスへの旅をする前に、ふと日本の最も古い絵画も見てみたいと思った。奈良県の明日香村にある、古墳の壁に描かれた絵だ。古墳の絵が描かれている石室は、洞窟に似て、閉鎖した暗い空間だ。そこには何か、フランスの洞窟壁画と共通するものがあるのではないか。そこで奈良の明日香村まで出かけ、キトラ古墳、そして高松塚古墳という、日本でのほぼ最古の壁画が描かれた古墳がある現場に、足を運んでみることにした。二〇一七年七月末のことだ。

キトラ古墳は、奈良県高市郡明日香村の南西部の小高い丘の上にある。一九八三年に石室内に色鮮やかな壁画が発見された。絵の破損が激しく、絵は保存のために石室の壁から剝がされた。石室というか、古墳そのものは、二〇一三年に調査が終了し、いまは埋め戻され、半球形の円墳が、その外観を見せている。

キトラ古墳の本物の石室は、もう見ることはできない。その代わり、古墳のすぐ横に、「キトラ古墳・四神の館」という施設ができ、そこでレプリカの展示や、剝がされた壁画の特別展示などがされている。だれも本物の古墳の石室に入ることができなくなっただけで、四神の館にある展示物を通して、キトラ古墳の壁画の世界を見ることになる。

四神の館には、原寸大の石室が再現され、壁画（レプリカ）のある石室内を見られる。古墳の小さな模型もあるので（円墳を半分に分けて、その断面を見ることのできる模型）、それと合わせて石室の構造を知ることができる。

なにより、四神の館の裏には、本物のキトラ古墳が、山の斜面に半球形で在るので、それと見比べながら、周囲のロケーションも含め、壁画が描かれた石室がどのようなものか、十分に想像することができる。だからキトラ古墳を知る最良の方法は、明日香村にある四神の館に足を運ぶことだ。

展示は順路に沿って見ていくと、石室の原寸大レプリカの次に、壁画に描かれた内容についての解説パネルがある。そのキトラ古墳の壁画で、自分がいちばん魅力的に感じたのは、石室の天井部分に描かれた星座の絵だった。赤い線で引かれた三つの円に（大中小の三つが同心円状にある。さらに太陽の黄道を表す円がもう一つ、中心点をずらして描かれている。その四つの円のあちこちに、直径六ミリほどの丸い金箔による星が、たくさん散りばめられている。その数三百五十ほどあり、「星座」として線で結ばれていたり、個別に散って輝いていたりする。

古墳とは、いうまでもなく、死者の亡骸を収めるための場所だ。その棺が置かれた石室の壁に絵が描か

れ、天井は、金の点々が輝く星座の絵になっている。だから棺の中の死者は、星空の下で宇宙空間に包まれている、ということになる。生前は、たとえ大変な権力者であっても、目の前の悩みを翻弄されてもいただろう。人は「ここ」の苦しみの中で生きている。しかし死後は、そういう些事も消えて、遥かなる宇宙という「かなた」の世界に包まれる。キトラ古墳の天井画パネルを見ながら、死者に星空というのは、よく似合う組み合わせだ、とそんなふう考えた。

キトラ古墳の石室に描かれているのは、星座だけではない。四匹の伝説上の動物が、壁の四面にそれぞれ描かれている。一九八三年、石室にファイバースコープのカメラを入れて、モニター越しに最初に発見されたのが、その動物のうちの一つで、北面にある「玄武」だった。これは亀と蛇を合体させたような架空の生き物（＝神）で、他の三面には、南に朱雀（鳥に似ている）、西に白虎（名前の通りで虎に似ている）、それに東面に青龍が描かれている。龍という伝説の生き物は、だれでもご存知かと思うが、蛇のような胴体に短い前足・後ろ足があつて、トカゲのような鉤爪になっている。いくつかの動物の形態を合成した架空の生き物である。

この展示施設の名前が「四神の館」というのは、この玄武（北）、青龍（東）、朱雀（南）、白虎（西）の、四匹の動物が描かれ、それが実在の動物の描写でなく、四匹の神獣であるところからだ。いわば、この四匹の神獣は、キトラ古墳の看板的存在なのだ。

さらに東面の壁の上部には太陽が、西面の上部には月が、金と銀で描かれている。さらにさらに、四面の壁の下の方に、それぞれ三体ずつ、つまり三×四で、計十二の図像が描かれている。この十二体すべて

朝、目を覚ますとコンク村にあるホテルの部屋だった。二つあるベッドのもう一つのほうには、息子が眠っている。静かに着替えをして、一眼レフカメラを持って、ホテルを出た。まだ朝早く、人影は少ない。フランスパンを抱えたおばさんが、石畳の道を歩いている。

中世の佇まいが残る、フランスでもっとも美しい村の一つと言われるコンクは、昼になると観光客でごった返す。とくに夏は賑わうという。だから、コンクのホテルに泊まって、朝早く、静かなこの村を散歩するのがよい。本で、そう読んでいたので、やや遠い距離で、深夜の到着となったが、夏の八月の旅でもあり、予約はコンク村にあるホテルにしたのだ。

山の中の、小さな村だ。十一世紀から十二世紀、この村が聖堂建築で栄えていた頃には三千人の村人がいたという。しかしいまでは村の人口は三百人ほどに減っている。この村の中心にあるのは、サント＝フオワ聖堂だ。スレート葺の屋根の家が肩を寄せるように集まっている村の中心をつらぬく石畳の道を登っていくと、左手下の土地に、石造りの大きな聖堂が建っている。そのサント＝フオワ聖堂の敷地を見下ろす。花が咲く草の生えた道端の下に、石畳の裏庭が広がり、蔦の生い茂った石壁の前を、赤いシャツを着た人が歩いていく。

何枚か写真を撮ってからホテルに帰り、息子と朝食をとった。ロビーには、木製の古い家具が置かれ、濃い赤で塗られた窓枠に鉢植えの花が咲き、窓の外には、うるこ状のスレートを並べた、苔の生えた屋根が見えた。「生きている中世」とも言われる村の風景も美しいが、泊まったホテルも、その村の空気がそのまま建物に結晶したかのような、美しい空間だった。

数日前、自分たちは日本を经ち、イタリアに立ち寄って、フランスのリヨンに入った。そこでレンタカーを借り、シヨーヴェ洞窟に行き、昨晚、この村に着いた。慌ただしい旅の移動で、短い朝の時間であったが、この古い村の空気は、体の筋肉に溜まった疲れを、少しづつほぐしてくれた。

今日の夜には、ここからまた数百キロのドライブをして、レゼジーという村のホテルに泊まる。レプリカでない、本物の洞窟壁画を見ることのできる村だ。明日からまた、先史時代の絵画を見る旅が再開するが、今日は一日、中世の美術を見る。ロマネスク美術は、千年も昔の古い美術だが、しかし一万年以上前の先史時代の洞窟壁画に比べたら、ほぼ現代のような、すぐそこにある美術だ。

朝食を終えて、村を旅立つ前に、ロマネスク美術の傑作の一つと言われるサント＝フォワ聖堂の壁に掘られたレリーフ彫刻を見に行くことにした。この村に来たのは、たんに美しい中世の佇まいが残る村の光景を見に来たのではなく、このレリーフ壁画を見ることが第一の目的だった。

教会の建物の正面を「ファサード」という。ロマネスク建築では、たいてい、大きな木の扉の入口があつて、その扉の上の壁面に、彫刻による装飾が施されている。ファサードは、建物内部の丸天井に形を合わせるように、大きなアーチ形のデザインがある。つまり扉の上に、半円形（または三角形）の装飾壁画があるのだが、そこを「タンパン（tympan）」という。

サント＝フォワ聖堂にもタンパンがあり、「最後の審判」を主題にした石のレリーフが彫られている。聖書の『マタイ福音書』の内容を描いたものだ。最後の審判というのは、死後に天国に行けるか、地獄に墮ちるか、その裁きを受けることである。つまり、このタンパンには、天国と地獄の光景が、石の彫刻で



レゼジーでは、いよいよ本物の洞窟壁画を見ることになる。琳太郎も嬉しそうで、「明日、洞窟壁画、見れるかも、と思うと、テンション上がってきた」という。しかし、実際に見学ができるかは、未定だった。これからチケットを取るのだ。

レゼジーの村で泊まった宿の名は、ホテル・クロマニヨン。古く美しい石造りの建物で、前回の旅でもここに泊まり、気に入ったので、今回も同じ宿にした。

洞窟見学は、日本で予約をしておこうと、ネットのそれらしいサイトを調べ、メールを出してみた。しかし今年の申し込みは、もう締め切ったという。どうやら、年の初めに一年分の予約を受け付ける。定員に達したら締め切り。そういうことらしい。「しかし、当日の九時からの受付もしています。先着順です」ともメールに書いてあった。つまり現場で、当日にならないと、事情はわからないということ。ただし、カップ・ブラン岩陰というところの見学だけは、このメールで受け付ける、という。とりあえず、一つだけでも、ということでは二名分を予約した。

なので、もしかしたら明日、見学できるのはカップ・ブラン一つだけかもしれない。しかも調べると、カップ・ブランにあるのは、彩色壁画ではなく、線画でもなく、ウマの姿を石の壁に彫った、レリーフなのだ。それはそれで楽しみだが、一つくらい先史時代の本物の「絵画」を息子に見せたい。そのためにフ

ランスまで来て、レンタカーを借りて、長い旅をしてきたのだ。

夕方、レゼジーの村に着いて、まだ明るかったので、洞窟壁画の見学受付をするオフィスの場所を確認しておこうと、行ってみた。十年ほど前の前回は、日本からファックスで申し込むとそれで予約完了だったが、システムが変わった。オフィスも、同じところにあるのか、道に迷わないか、その確認もあつて、ホテルに荷物を降ろした後に車で出かけた。オフィスは、村はずれの、車で十分ほどの山の麓にあつた。フォン・ド・ゴームという洞窟壁画のある小山の入口の、木造の山小屋のような建物がオフィスで、昔と変わっていないかつた。ただ建物の前の広場に、固定されたベンチがあつて、席に番号がふつてある。これは前はなかつた。番号は、一から始まって五十二まで、席の数は五十二あつた。オフィスの窓に貼られた説明書きを見ると、毎日九時から受付をし、先着五十二名のみ見学可とある。しかし、ネットでフランスの旅行ガイドという人のブログを読んでいたら、九時には満席になるので、なるべく早く行くべきだと書いてある。ホテル・クロマニヨンの受付でも、宿のおばさんに聞いたなら「七時半には着くようにすべきだ」という。ともかく、こちらは明日しかないチャンス逃すわけにはいかない。早朝六時に起きて、すぐにホテルを出ることにした。

そんなことで、前日の夕方に、受付オフィスの場所を確認して、ホテルに戻り夕食のため、村の通りに徒歩で出かけた。レゼジー村は、先史時代の洞窟壁画の観光で栄えているからか、ホテル・クロマニヨンだけでなく、ホモ・サピエンスという名の店もある。ここは何時代の村だ、とおかしくもなつたが、マドレーヌ文化の名前の元になつたラ・マドレーヌ岩陰や、ネアンデルタール人のムステイエ文化の名前の元

【参考図書】（日本語の単行本のみ）

- 『洞窟の壁画』 H・キユーン、岡元藤則訳、山本書店、一九六〇年
- 『洞窟の中の心』 デヴィッド・ルイス・ウイリアムス、港千尋訳、講談社、二〇一二年
- 『旧石器時代の洞窟美術』 P・アッコー、A・ローゼンフェルト、岡本重温訳、平凡社、一九七一年
- 『芸術の起源を探る』 横山祐之、朝日新聞社、一九九二年
- 『芸術の起源』 外山卯三郎、芸術書房、一九六四年
- 『人類最古の芸術』 外山卯三郎、芸術書房、一九七一年
- 『洞窟へ』 港千尋、せりか書房、二〇〇一年
- 『先史時代の宗教と芸術』 A・ルロワグーラン、蔵持不三也訳、日本エディタースクール、一九八五年
- 『世界の根源』 アンドレ・ルロワグーラン、蔵持不三也訳、言叢社、一九八五年
- 『身ぶりと言葉』 アンドレ・ルロワグーラン、荒木亨訳、ちくま学芸文庫、二〇一二年
- 『はじめにイメージありき』 木村重信、岩波新書、一九七一年
- 『永遠の現在』 S・ギーデオ、江上波夫・木村重信訳、一九六八年
- 『ヒトはなぜ絵を描くのか』 中原佑介編、フィルムアート社、二〇〇一年
- 『ヒトはなぜ絵を描くのか』 斎藤亜矢、岩波書店、二〇一四年
- 『原始美術』 レオナード・アダム、石田義則訳、大陸書房、一九七六年
- 『洞窟壁画の音』 土取利行、青土社、二〇〇八年

- 『最古の文字なのか?』ジエネビーブ・ボン・ペッツインガー、櫻井祐子訳、文藝春秋、二〇一五年
- 『ラスコーの壁画』ジョルジュ・バタイユ、出口裕弘訳、二見書房、一九七五年
- 『ドキュマン』ジョルジュ・バタイユ、片山正樹訳、一九七四年
- 『世界遺産ラスコー展』海部陽介監修、毎日新聞社、二〇一六年
- 『人類がたどってきた道』海部陽介、NHKブックス、二〇〇五年
- 『アルタミラ洞窟壁画』アントニオ・ベルトラン監修、大高保二郎訳、岩波書店、二〇〇〇年
- 『心の先史時代』ステイーブン・ミズン、松浦俊輔・牧野美佐緒訳、青土社、一九九八年
- 『歌うネアンデルタール』ステイーブン・ミズン、熊谷淳子訳、早川書房、二〇〇六年
- 『ネアンデルタール人とは誰か』クリストファー・ストリンガー／クライヴ・ギャンブル、河合信和訳、朝日新聞社、一九九七年
- 『ヒトの心はどう進化したのか』鈴木光太郎、ちくま新書、二〇一三年
- 『こどもの発達とヒトの進化』井尻正二、築地書館、一九八〇年
- 『世界遺産 高句麗壁画古墳の旅』全浩天、角川書店、二〇〇五年
- 『キトラ古墳は語る』米村多加史、NHK出版・生活人新書、二〇〇五年
- 『高松塚とキトラ』米村多加史、講談社、二〇〇八年

### 布施英利（ふせ・ひでと）

美術批評家・解剖学者。1960年生まれ。東京藝術大学・美術学部卒業。同大学院博士課程修了（美術解剖学専攻）。学術博士。その後、養老孟司教授の下での東京大学医学部助手（解剖学）などを経て、現在に至る。解剖学と美術が交差する美の理論を探究している。これまでの著書には、28歳の大学院生のときに出した『脳の中の美術館』を皮切りに、『構図がわかれば絵画がわかる』『遠近法がわかれば絵画がわかる』『色彩がわかれば絵画がわかる』の三部作、『人体 五億年の記憶』『子どもに伝える美術解剖学』など約50冊がある。また養老孟司との共著『解剖の時間』、TYM344とのコラボ『わかりたい！現代アート』などがある。

### 布施琳太郎（ふせ・りんたろう）

1994年生まれ。美術家。2017年、東京藝術大学・美術学部・絵画科（油画専攻）卒業。現在は同大学院・映像研究科・修士課程（メディア映像専攻）に在籍。映像や絵画を使用したインスタレーション作品の制作のほか、『iPhone mural（iPhoneの洞窟壁画）』（2016年）、『新しい孤独』（2017年）など、展覧会企画も多数。先史時代の洞窟壁画と、iPhoneをはじめとした情報端末が形成する社会・ライフスタイルをテーマに研究・制作に取り組んでいる。

写真撮影：布施琳太郎

## 洞窟壁画を旅して ヒトの絵画の四万年

---

2018年9月10日 初版第1刷印刷

2018年9月20日 初版第1刷発行

著者 布施英利

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／益子悠紀

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1747-7 © Hideto Fuse 2018, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。